

一たび開始されたる猛惡なる事業は如此にして繼續せらるゝ也、鹵掠、凌虐、殺戮、偽善、盜賊、殊に甚しきは最も恐るべき詐偽——基督教徒及び佛教徒兩つながら其宗教の教義を曲解せるが如き——すらも繼續さるゝ也。

之が主なる責任者たる露國皇帝は、斷へず兵士を點閱して彼等に感謝し、賞與し、且之を奨勵す、彼は又勅旨を發して豫備兵を召集す、彼の忠良なる臣僚は再三再四、其財産生命を我敬愛せる(口先のみにて)君主の足下に委すと稱す而して一面に於ては彼等は口先のみにあらずして、直に實行に依て功名を立てんが爲に、人の父、人の良人を取り去り、一家より其稼ぎ人を奪ひ去りて、以て屠戮を準備せしむ、露國の形勝益々非なるに従つて、新聞記者の虚言は益々放漫を致す、彼等は何人も彼等に反對せざるを知れるが故に、醜辱なる敗北を勝利と詐り、以て其紙數を増加し、金錢を利するの具に供す、戰爭に要する財貨及び勞働の益々多きに従つて、有司及び投機師の之に依て私利を營むもの亦益々多し彼等は何人も彼等を罪する者なきを知れり、何となれば各人皆な同一の私利を營まざるはなればなり、不仁、陋劣、遊惰の學校に在つて數年間殺人の業を習練せる軍人は、憐れなる者よ)密かに其給料の増加を樂むのみならず、更に上官の戦死の爲めに、立身の門戸を開くるを喜ぶ、基督教の牧師は斷へず、人類を德激して此最大罪惡を犯さしめんとし、神に向つて戰爭を幫助せんことを祈願して、以て其神聖を冒瀆し、甚しきは即ち殺人の現場に臨み、手に十字架を持して、人類の罪惡を奨勵するをすらも、非難せずして是認する也、而して是等同一事は亦日本に於ても行はれ居れり

昏迷せる日本人は、其勝利を得たるの結果、殺人に對して一層大なる狂熱を現しつゝあり、日本皇帝も亦其軍隊を點閱し、賞賜し、幾多の將官は其殺人を學べることを以て、高尚なる智識教育を得たるが如くに思惟して、熾んに其武勇を相誇負す、不幸なる勞働者が必要なる職業と其家族とより引離されて呻吟することも露國と同じく、新聞記者が虚言を吐散して、利益を得るを喜ぶとも亦露國と異ならず、而して亦恐らくば(殺人が德行として尊崇せらるゝ處には、各種の惡徳が盛なるに至るは當然なるが故に)日本に於ても、長官及び投機師は競ふて私利を營めり、日本の兵學が歐洲人に劣らざるが如く、日本の神學者及び宗教家の宗教的欺罔及び褻瀆の術も亦決して歐洲人の後に在らず、否な彼等は佛陀が禁じ玉ひし殺生を許すのみならず、是を是認して憚らざる迄に、佛教の大教理を紛更す、彼の八百以上の寺院を統轄せる佛學者釋宗演は説て謂らく、佛陀は殺人を禁じ玉ひしと雖も、而も彼も尚ほ一切衆生が無邊の慈念を以て結合するに至る迄は、平和は決して來ることなげんと曰へり、然らば即ち扞格せる所の物をして調和せしむるの手段としては、戰爭殺人も亦必要なりと

斯くては世に人間精神の統一、相愛、哀憐、及び人生の神聖等に關する基督教及び佛教の教訓なきも同様なり、露人も日人も等しく是れ人間にして、既に真理の光に浴せるに、尙野獸の如く、否野獸よりも一層惡しく、彼等は互に出來得る防り多くの生命を絶たんとて専心一意努力しつゝあり、其結果、數千人は既に地中或は地上に腐敗しつゝあり、或は腫れたゝれて海上に浮びつゝあり、又日本及び露西亞の野戦病院に於ては、數千の負傷者

然り、人類と戦争との關係は、今や全く古へと異なれり、近く七十七年頃に比してすら全く異なれり、今や會て無かりし所の者を生せり

諸新聞紙は、露國皇帝が其殺人の爲めに派遣すべき人民を麻痺するの目的を以て、國內を巡幸するに當り、各地人民は非常なる熱心なを以て歡迎せる由を報じたり然れども事實は全く之に反せり、某地に於ては三人の豫備兵殺れて死し、某處に於ては更に五人の死者ありき、而して或地方に於ては、其良人を取去られたる一婦人が徴兵係の室に其小兒等を伴ひ來り、同處に捨て置きて行衛知れずなれるあり、又或婦人は軍隊指揮官の庭内に入りて縊死せりといふ、是等皆な不満、悲痛、絶望の結果ならざるは無し、彼の「信仰の爲め、君王の爲め、祖國の爲め」てふ語句や、國歌や、萬歳の叫聲や、最早人民に對して以前の如き効力なし、今や別に一種の戦争——即ち人民が其賦課せらるゝ事業の虚偽と罪惡とを自覺せるより生ずる心中の苦悶は漸次に彼等の間に蔓延しつゝある也

然り、我等の時代に於ける大争闘は、今の日露間のそれにもあらず、黄白兩人種間に邁進せるそれにもあらず、地雷、爆彈、銃丸に依て行はるゝそれにもあらず、實に精神的争闘也、而して此争闘や、現に天啓を期待せる人類の明達なる自覺と、一般人類を圍繞し壓迫せる黑暗及び負擔との間に、間斷なく行はれつゝある所の者也

然其吾人を以て、全然トルストイ翁の所説に雷同盲従する者となさば、是大なる誤解也、吾人は元より翁が、戦争の罪惡、害毒及之より生ずる一般社會の危険を切言するを見て感嘆崇敬を禁せずと雖も、而も將來如何にして此罪惡、害毒、危険を救済防遏すべきかの問題に至ては、吾人は不幸にして翁と所見を異にする者也

翁が戦争の起因と其救済の方法を述べらるや、滔々數千言、議論の巧、措辭の妙を極むと雖も、要は、戦争の起因は人々眞個の宗教を喪失せるが爲なり、故に之が救済や、人々をして自ら悔改めて神意に従はしむべし、即ち隣人を愛し己れの欲する所を人に施さしむべしといふに在る者の如し、單に此如きに過ぎずとせば、吾人豈に失望せざるを得んや、何となれば、是れ恰も『如何にして富むべきや』てふ問題に對して『金を得るに在り』と答ふるに均しければ也、是れ現時の問題を解決し得るの答辯にあらずして、唯だ問題を以て問題に答ふる者に非ずや、吾人は此點に於て、翁が一關未だ透し得ざる者あるを惜む

吾人は必しも宗教を無用とし有害とするものに非ず、然れども人は麵包のみにて生くる能はざるが如く、又聖書のみにて生くる者に非ず、靈なきの人が死するが如く、肉なきの人も亦死なり、夫れ一飯にだも餐くこと能はざる者、安んぞ道を聞くに遑まらんや、人は盡く夷齊に非ず、單に「悔改めよ」と叫ぶこと、幾千萬年なるも、若し其生活の狀態を變じて衣食を足らしむるに非ずんば、其相喰み相搏つ、依然として今日の如けんのみ

吾人社會主義者が非戦論を唱ふるや、其救済の方法目的如此く茫漠たる者に非ず吾人は此點に於て一貫の論理を有し、實際の企畫を有す、吾人の所見に依れば今の國際戦争は、トルストイ翁の言へるが如く、單に人々が耶蘇の教義を忘却せるが爲めにあらずして、實に列國經濟的競争の激甚なるに在り、而して列國經濟的競争の激甚なるは、現時の社會組織が資本家制度を以て其基礎となすに在り、の故に將來國際間の戦争を滅絶して其被害を避けんと欲せば、現時の資本家制度を顛覆して社會主義的の制度を以て之に代へざる可らず、社會主義的の制度一たび確立して、萬民平等に其生を遂ぐるに至らば、彼等は何を苦しんで悲惨なる戦争を催起するの要あらんや

之を要するにトルストイ翁は、戦争の原因を以て個人の墮落に歸す、故に悔改めよと教へて之を救はんを欲す、吾人社會主義者は、戦争の原因を以て經濟的競争に歸す、故に經濟的競争を廢して之を防遏せんと欲す、是れ吾人が全然翁に服するを得ざる所以也